2018筑波大学附属駒場論集58集

旧約聖書のモーセ五書（トーラーTorah）に使われている朗唱法（タアメー・ハミクラーTaame Hamikra）についての研究

筑波大学附属駒場中・高等学校　技芸科
小宮　一浩・植村　　徹・土井　宏之
渡邉　隆昌

旧約聖書のモーセ五書(トーラーTorah)に使われている朗唱法(タアメー・ハミクラーTaame Hamikra)についての研究

筑波大学附属駒場中・高等学校　技芸科
小宮　一浩・植村　　徹・土井　宏之
渡邉　隆昌

要約

ヘブライ語旧約聖書のモーセ五書をトーラー(Torah)という。そのヘブライ語のトーラーを見ると母音記号(ニクダー)の他にいくつかの記号が見受けられる。これらはトーラーを朗唱(朗読)するための記号でありタアメー・ハミクラー(Taame Hamikra)という。タアメーは「味付け」、ハミクラーは「朗唱または朗読」であるのでタアメー・ハミクラーは「朗唱(朗読)の味付け」という意味になる。つまり、このタアメー・ハミクラーを理解できればトーラーを朗唱して歌うことが可能になるということである。今回はトーラーのタアメー・ハミクラーを学ぶに至る経緯と、トーラーのタアメー・ハミクラーについて分析研究し考察した。

キーワード：モーセ五書、トーラー(Torah)、タアメー・ハミクラー(Taame Hamikra)、朗唱法、ヘブライ語記号

1　タアメー・ハミクラーを知るまで

1.1 はじめに

海外､特にヨーロッパの文化を知るには聖書(旧訳と新訳)を知ることが大切である｡その教えや考え方などがその国の文化の根底に根ざしており、それらの上にあらゆるものが反映しているからである。

自分なりに聖書についていくつかのエピソードを知ってはいたが、きちんと聖書を知ろうと思いたち聖書を購入してみた。私が購入したのは「原文校訂による口語訳 聖書 フランシスコ会聖書研究所 訳注」である。それは旧訳聖書と新約聖書の合併本で､通常の聖書(３９書＋２７書＝６６書)より７書も多い７３書が １ 冊にまとまっていた。ページをめくると単語の注釈も大変多く、且つその内容も詳細であった。何よりも一番嬉しかったのは様々な絵や当時の通路や戦いなどの遍歴がわかる地図等の図版が百個以上もあり、それだけでも内容理解にとても役立つ貴重な資料になると感じたことだった。本文の意味や内容を知り、理解を深めるためには細かな注釈や地図等の図版などを知ることが大変重要だと思っているからだ。現地で使われている物の名前や形、現地の町や地域の旧名称、現地の地形や町と町の距離感、旅の経路、戦いの流れや戦いの場所、町から町へと移動していく移動経路や方向など当時の通路等の地図図版ならば視覚的にすぐに知ることができるからである。この本以外にも新共同訳や七十人訳、新改訳、岩波の文語訳などの聖書も出版されていたが、フランシスコ会の聖書ほどの図版はなかった。また同時に何故このようにいくつもの訳本があるのか不思議だった。

最初の文章をいくつかそれぞれの聖書で読み比べてみると微妙に訳の表現が違っていた。何故だろう…訳の基にしている原文が違うのだろうか？これが最初の疑問だった。それなら最初に書かれた原文を読んでみれば良いのではないか？旧訳聖書はユダヤの教典でありヘブライ語で書かれている。ヘブライ語で旧約聖書を読むにはどうしたらいいのか？自分なりに探してみたがなかなか見つからなかった。

そんな頃に運良く知人の紹介で株式会社ミルトス(イスラエル・ユダヤ文化を日本へ紹介する会社)で新たに始められる「ヘブライ語対訳で聖書を読む会Ⅰ」の開講を知ることができた。ヘブライ語初学者でも参加可能かと問い合わせてみたら大丈夫とのことだったので参加することに決めた｡現在も同研究会で学び続けている。

因みに、聖書で使われているヘブライ語は現代ヘブ

Study about the Recitation Method (Taame Hamikra) Used in the Moses Five Books (Torah) in the Old Testament

ライ語とは違い古語のヘブライ語である。例えが良いか解らないが、日本の「古事記」や「万葉集」に近いものを読んでいると思っていただければ少しは分かりやすいのではないかと思う。ヘブライ語の「創世記」冒頭にもベレシート(Bereshit)【はじめに】と書いてある。

1.2 タアメー・ハミクラーとの出会い

株式会社ミルトスでの「ヘブライ語対訳で聖書を読む会Ⅰ」で学び始めて、ヘブライ語の読み方など最初から教えていただいた。そのヘブライ語逐語訳対訳のテキスト原文には母音記号(ニクダー)以外にタアメー・ハミクラーという記号が付いていた。それは文節の区切りやアクセントを示すとのことだった。更に驚きだったのはそれが朗唱(歌う)のための記号だというのだ。つまり、それを理解すれば楽譜も使わずに音をつけて歌うことができるというのだ。これには本当に驚愕した。またとても興味関心を引いた。

株式会社ミルトスの代表取締役(社長)であり、私の通っている「ヘブライ語対訳で聖書を読む会Ⅰ」の講師でもある谷内意咲先生に聞いたところタアメー・ハミクラーの歌い方までは教えられないとのことだった。しかし、谷内先生のお持ちのヘブライ語資料の中に少しだけ楽譜があるとのことでその一部を見せていただいた。それはヘブライ語と同じく右から左へ読む楽譜で、これにも正直驚いた。いつもと楽譜を読む方向性が真逆だったからだ。

1.3 タアメー・ハミクラーを知る

「ヘブライ語対訳で聖書を読む会Ⅰ」の講座の中でもタアメー・ハミクラーについて触れてくださり、タアメー・ハミクラーがどういうことを表しているのかという大まかな枠組み(アクセントの位置を示し、文節を区切り、且つ朗唱記号だということ)は理解したつもりだった。分離符と結合符があり、それらを組み合わせて読むことも解った。しかし、どれとどれを組み合わせるのかが解らない。右から読む楽譜を基にどのように歌うのかなと試したりもしたが、いかんせん朗唱を聴いたことがないので想像がつかなかった。

楽譜を見て更に困ったのが同じ記号(言葉)なのに音形(音列)がかなり違うものが複数あったことも戸惑う原因だった。つまり、前後の記号や言葉等によって同じ記号でも歌い方が変化する可能性が大だと予測できる訳である。こうなるともうお手上げで解明への出口がまた見えなくなってしまった。

同研究会に参加する度に、どのようにしたらタアメー・ハミクラーを歌うことができるようになるだろうかと谷内先生に尋ねている自分がいた。谷内先生からの返答はというと、タアメー・ハミクラーの朗唱を日本で教えられるのは唯一人、日本ヘブライ文化協会のA先生くらいだろうとのことだった。いつの日かそのA 先生から教えていただける日が巡ってくることを願いつつ講座へ通った。

2　タアメー・ハミクラーでの朗唱を知る

2.1 日本初のタアメー・ハミクラーを用いた朗唱講座

「ヘブライ語対訳で聖書を読む会Ⅰ」に参加して２年近くが経った頃、同講座の休憩中の会話の中で近日中にタアメー・ハミクラーを使って創世記第１章を朗唱する講座が日本ヘブライ文化協会であるらしいという情報を得ることができた。日本ヘブライ文化協会への連絡先を教えていただき、すぐに連絡してみた。その講座は、A先生による３日間の集中講座(３時間×３日)で、創世記第１章をヘブライ語で朗唱するという。創世記第１章をヘブライ語で読めますかと聞かれたので、株式会社ミルトスの「ヘブライ語対訳で聖書を読む会Ⅰ」で読みましたと伝え、２年近く聖書ヘブライ語を学んでいると告げると参加許可をいただくことができた。

2.2 タアメー・ハミクラーでの朗唱を知る

集中講座当日、タアメー・ハミクラーの一覧表とテキストなどのプリントをいただき、タアメー・ハミクラーがどういう特徴等があるかの簡単な説明を聞いた。今回教えていただく朗唱法は、アシュケナズィーという中央ヨーロッパ方式という歌い方とのこと。加えて、この歌い方はモーセ五書でのみ使うことができるとのことだった。詩篇などではまた別の歌い方(味付け)があるとのこと。

休憩後に創世記第１章の朗唱に入った訳だが、１節ずつこの結合符とこの分離符が使われているのでこう歌うことになると口伝で教えていただいた。記号をその言葉で歌い、次にそのメロディーにテキストを入れて歌う。これを何度も繰り返して歌い、覚えていくのである。

お気づきになっただろうか？この講座では楽譜を一切使用していないのである。母音記号(ニクダー)とタアメー・ハミクラー付きのヘブライ語テキストを見ながら、先生の歌う音を耳で聴いてその後に続いて歌っ

ていくのである(つまり口伝)。正に昔ながらの方法で教えていただいた訳である。初日の帰り際にA先生にタアメー・ハミクラーの楽譜などはありませんかと当然尋ねたが、そういうものは見たことも無いし通常はこうやって口伝で伝えられていくものだからと言われた。ごもっともなことである。イスラエルでは今でもこうやって口伝で伝えられているのであろう。先生もそうやって覚えてこられたのだろう。因みに、この集中講座が日本で初のタアメー・ハミクラー朗唱講座であると知らされた。

講座を受けながら私は必死に先生の歌うメロディーを聴き取り、ドイツ音名に直してテキストに書き込んでいった。A 先生が何度かここは通常の形と違いますね、気をつけましょうと言って例外部分を指摘してくださった。これも後で役に立ってくるのである。

初日は第１章の途中で終わった。自宅に帰るとテキストに書き込んだドイツ音名を見ながら録音を聴いて確認作業を繰り返した。そして、翌日は第１章の最後まで到達し、翌々日は第１章を最初から最後まで何度か繰り返し歌って集中講座を終えた。

集中講座への参加者は１０名を少し超える程度だったが、皆さんもA先生の前にマイクを向けて先生の歌うメロディーを録音していた。そうでもしないとさすがに覚えられないのだろう。私も後学のために同様に録音させていただいた。そしてその録音のお陰で、この論文が書けていると言っても過言ではないのである。

2.3 タアメー・ハミクラー朗唱講座の中で聴いた音源

タアメー・ハミクラー朗唱講座の中で、A 先生が歌う他にインターネットで先生が見つけたサイトからダウンロードしたのだろうか、現地人らしき人の歌声を聴かせていただいた。A 先生が歌って教えてくれた音よりも少し音数が多い感じがしたが基本は同じようだった。A 先生もタアメー・ハミクラーは、国や地域が違えば歌い方も変わるので先生の教えてくれた歌い方が決定版だということはないと最初に言われていた。しかし、あの音源をもっと聴きたかった。講座終了時にあの音源がどのサイトにあるのか尋ねなかったのが後で悔やまれた。

その後、数ヶ月探してやっと同じ音源のあるサイトを見つけることができた。そのサイトをよく見てみると創世記第１章だけではなくモーセ五書全て書かれていて、またそれらの音源もアップされていた。これは私の研究にとても役立つものとなった。

2.4 遂にタアメー・ハミクラーの楽譜を発見

音源のあるそのサイトをくまなく調べていると、タアメー・ハミクラーの一覧テーブルが出てきた。集中講座でA先生からいただいたものとほぼ同じである。それをよく見てみると、いくつかの節毎に色づけが違っていた。もしやこれは何かあるのかとクリックしてみたら、なんと楽譜が出てきたのである！それもあの音源の人の声である。楽譜をよく見てみると様々な音符が付いていた。以前に音源を聴いたときに音数が多いと思ったのは装飾音をつけて歌っていたのである。楽譜というものはなんと情報量が多いのだろうか、改めて素晴らしい発明だと感心した次第である。

ただ、そこに書かれていた楽譜だとヘブライ語のアクセントの位置と楽譜の強拍がずれていたりして多少違和感があった。また、言葉が誤って書かれているものや音符の長さが音源とかなり違うと思われるものもいくつか見つかった。口伝で歌われていたものをアクセント通りに楽譜として書くということは本当に難しいことなのである。楽器の音を聴き取るのと人の声を聴き取るのでは難易度のランクが明らかに違う。人の声を聴き取ることは極めて難しいのである。因みに、絶対音感を持っている人でも人の声を聴き取るのは厳しいという人が多いのも事実なのである。人の声というものは、同じ音色の人はまずいないのだから致し方ないのである。それ故に人の声は聴き取りにくいのである。

それにしても、その当時のヘブライ人は音符の記譜法もない時代に楽譜になりうる記号を既に見いだして使用していたということになるのだから、これまたとてつもなく凄いことなのである。それも少なくみても紀元前３～４世紀頃からは確実にそのように歌われていただろうと思われる。もしも、モーセがそのように書いた、またはそう書くように指示したのなら紀元前１４世紀頃にはその形になっていたと考えられるからである。西洋音楽では一般にグレゴリア聖歌やネウマの楽譜が西暦９～１０世紀頃に形成され、現在の楽譜の記譜法に定着してくるのは西暦１５～１６世紀頃であるのだから…。それ故に古代ユダヤの人達の記譜法とは本当に素晴らしいものだと感心してしまう。古代から使用していたと思われるこの記譜法タアメー・ハミクラーの研究をしていてそのように感じるのである。

タアメー・ハミクラーの楽譜をよく見てみると、普通に書いてある音がA先生の教えてくださった音形と非常に似ていた。それに様々な装飾音が付いていた。そうか、A 先生は装飾音のない基本形を教えてくださ

ったのだと楽譜を見ながらそう確信したのである。装飾音は飾りで派手に聴かせたりするためのものがほとんどなので装飾音を歌わなくても全く問題が無いのである。正に納得である。

その楽譜には他の記号との組み合わせもいくつか掲載されていた。これもとても参考になった。以前に谷内先生から見せていただいた言葉が同じなのに音形が違うのはこういう場合のことなのだろうなと悟った。勿論全ての組み合わせが書かれていたわけではないので、それからはまたテキストと音源による研究を続けることになる。

2.5 ヘブライ語聖書対訳シリーズとコーレン聖書

「ヘブライ語対訳で聖書を読む会Ｉ」で使用しているテキストはミルトス社出版のヘブライ語聖書対訳シリーズを使用している。このシリーズは全部で４５巻。その全ては発行されていないが、既刊本もいくつか在庫切れがありなかなか揃えることが難しくなっている。今年の７月には、ずっと在庫切れだった「申命記２」を遂にオンデマンド版で購入することができた。オンデマンド版は当然割高になってしまうのだが新品を手に入れるにはそれしかないので致し方ないだろう。しかし、これを購入できたことでモーセ五書全ての対訳シリーズが手に入ったことになるのである。

聖書関係の書物はそれほど出版数も多くなく、なかなか手に入らないのが現実である。東京で比較的聖書関係の書物が揃っているのは銀座の教文館であろうか。そもそもヘブライ語聖書の対訳になっているシリーズは他に見たことがない。

ミルトス社には既刊シリーズの在庫本が残っており、私も購入させていただいた。既に２３冊ほど購入している。その他にもヘブライ語関係や聖書関係、イスラエル関係の珍しい本や現地のＣＤなどをいくつか購入することができた。これも今回の研究には欠かせない参考文献となっている。

購入した書物の中でも特に威光を放っているのがコーレンの聖書である。勿論全てヘブライ語で書かれているが、その巻末付録に大変貴重なものがたくさん載っていたのである。これは今回の研究にとても役立った。イスラエル・コーレン編集のトーラーと預言書のタアメー・ハミクラー・テーブルとそれぞれの楽譜が載っていたのである。これにより音符への確認作業が今まで以上にはかどったのは言うまでもない。多少、異なる音形もあったが８割近くが手元にあるものと似た音形で書かれていたのである。

2.6 インターネット、グーグル、YouTube 等で検索

今日はなんと便利な時代になったのだろうか。最近はインターネットも普及し、グーグルで検索もすぐにできる。また YouTube には YouTuber といわれる人が様々な動画を載せているのである。もしかしたら、朗唱法についてのサイトや動画が他にあるかもしれないと思い色々なツールで検索してみた。その結果、いくつかのサイトと動画を発見することができた。それらは音形（音列）が聴いたものとかなり違うものがほとんどだったが、その中に分離符と結合符の組み合わせについて語っている内容を見つけることができた。この内容は大いに参考になった。以前の疑問（同じ言葉なのに音形が違うなど）をかなり解消できるかもしれないと思ったからだ。それらを見終わって、組み合わせ方のルールについて振り返ったときにある程度のアウトラインが見えてきたように感じられたことはとても嬉しいことだった。この先ではタアメー・ハミクラーについて現時点で知り得た組み合わせや音形などを挙げて述べていきたいと思う。

3　実際のタアメー・ハミクラー

3.1 実際のタアメー・ハミクラーで文を考える

さて、長い前置きのようなってしまったが、これからが本題である。実際のタアメー・ハミクラーを見てみよう。タアメー・ハミクラー・テーブルをご覧いただきたい。勿論、ヘブライ語で書かれているので右から左へ読んでいくことになる。一見、文字の羅列のように見えるが、これらの語句には関連がある。前述のように、タアメー・ハミクラーには分離符と結合符がある。分離符は、そこで文を一時停止させたり終止させる働きがある。結合符は、分離符と組み合わさって一つの語群のようになる。

色分けができればまだ見栄えが良く違いも分かりやすかったと思うのだが、なかなかそうすることもできず少し残念な気持ちになった。単語の途中の上下、単語の前の上下、単語の最後の上下に付いている記号がタアメー・ハミクラー記号である。母音記号であるキクダーやダゲッシュ（文字内の点）は灰色にしてある。

タアメー・ハミクラー一覧表の分離と書かれている方が分離符であり、結合と書かれている方が結合符である。分離符の上の区分の方がより強い終止になる。つまり、ソフ・パスークは文の終わりで日本語の句点（。）に相当する。文は必ずこのソフ・パスークで終わ

るのである。音楽でいうならば完全終止である。そのすぐ下のエトナフタは文章を２分する時に使う切れ目で日本語の読点(、)に相当すると思えば分かりやすいと思う。音楽でいうならば半終止である。これら２つの分離符のうち、エトナフタが文脈理解に大変役に立つのである。このエトナフタまでが文の前半部分となり、その後ソフ・パスークまでが文の後半部分となるのである。

例えば、次のような文章がある。創世記第１章第１節である（カタカナは左から右へ読むことにする）。

בְּרֵאשִׁית בָּרָא אֱלֹהִים אֵת הַשָּׁמַיִם וְאֵת הָאָרֶץ׃

↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑

ソフ・パスーク　ティプハ　エトナフタ　ティプハ

メルハー　メルハー　ムナフ

⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①

これをタアメー・ハミクラーで見てみると７つの記号が組み合わさってできている文なのである。ここではメルハーとティプハは２回ずつ出てきているので実際には５つの記号だけなのだが、最初は混乱するので今は区別しないことにする。このうち、分離符は①・③・⑤・⑦である。分離符の後で一時停止できるのだが、最大の終止は⑦のソフ・パスークで文が終わる文の終止点である（完全終止）。残りの①・③・⑤の中では③のエトナフタが次に強い終止になり、この文を分割するような切れ目になる（半終止）。この分析ができるとこの文は③のエトナフタまでが前半部分となり、その後から⑦のソフ・パスークまでが後半となる訳である。またティプハも分離符なので軽い切れ目になる。

בְּרֵאשִׁית בָּרָא אֱלֹהִים אֵת הַשָּׁמַיִם וְאֵת הָאָרֶץ׃

↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑

ソフ・パスーク　ティプハ　エトナフタ　ティプハ

メルハー　メルハー　ムナフ

❼ ⑥ ⑤ ④ ❸ ② ①

【　後半　】【　前半　】

בְּרֵאשִׁית בָּרָא אֱלֹהִים אֵת הַשָּׁמַיִם וְאֵת הָאָרֶץ׃

カタカナ読み(右から左へ読んでください)

ツレアハ トッエェヴ ムイマャシハ トッエ ムーヒロエ ーラバ　トーシレベ

逐語対訳(右から単語毎に左から右へ読んでください)

地　そして～を　天　を　神は　創造した　はじめに

タアメー・ハミクラーを基にして忠実に日本語へと訳すと「はじめに、神は創造した。天を、そして地を。」となる。これがヘブライ語聖書の原文に沿った正確な訳であると思う。ところが…身の回りで手に入りやすい聖書３冊ではどう訳されているかというと…次のように訳されているのである。新共同訳では「初めに、神は天地を創造された。」、新改訳では「初めに、神が天と地を創造した。」、口語訳では「初めに、神は天と地を創造された。」となっているのである。新共同訳にいたっては「天地」という１単語があるかのように訳されている。こうなるとだいぶ話が変わってきてしまうと私には感じられる。皆さんにはどれも同じに読めるだろうか？原文に即した訳と比べて、少し違いがあるとは思われないだろうか？日本語として分かりやすいように読みやすく訳してあればそれで良いのだろうか？私にはどれもちょっとだけ厳密さに欠けているように感じられる。こういう細かなことの取りまとめの連鎖が意訳となり、やがては誤訳へとつながってきてしまう原因になっているのではないかと私は危惧する。旧約聖書の最初の冒頭１文だけでもこれだけの差異があるのである。正にこのことが私を原文であるヘブライ語聖書を読んでみようと思わせた要因なのである。

3.2 タアメー・ハミクラーのアクセントについて

タアメー・ハミクラー・テーブルや一覧表を見ているとおやこれは？と思える記号がいくつか出てくる。それらは文字列の前下・前上・後上に飛び出ている記号のこと(文字列の両外側にある記号)であるが、それらの記号はアクセントの位置を表わさない。アクセントを表す記号は基本的に文字列の中にある記号である。つまり、文字列の外側にあるパシュタ、ザルカ、セゴール、イェティーヴ、テリシャ・ケタナー、テリシャ・ゲドラーの記号はアクセント位置ではないということである。この辺りも少し分かりにくいところである。尚、ザルカは別の記号(⌒に似たもの)が使われることもあるので気をつけたい。また、レヴィーイは点ではなく四角が少し角度をずらした菱形に近い形である。

3.3 分離符と結合符の組み合わせについて

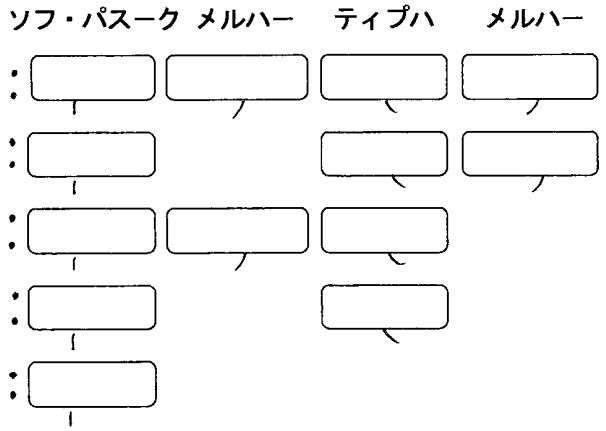
さて、分離符と結合符の組み合わせについて見てみることにする。よく出てくる記号から取り上げてみよう。組み合わせの塊(節)として解りやすいようにグループ毎に述べていくことにする。

① Mercha ＋ Tipcha, Mercha ＋ Sof Pasuk

メルハーは、ティプハやソフ・パスークと結びつく。ソフ・パスークは文の終わりを意味する。文が他の形で

終わることは無いので文の終わりは必ずソフ・パスークで終わることになる(神による十戒の言葉は例外と考えてください。その部分では文末にダブルコロンが付いていてもレヴィーイで終わったり、エトナフタで終わったりしていることがあります。そこにはタアメー・ハミクラー記号も複数付いていたりします。)。これらの組み合わせはソフ・パスークを含んでいるのでそれらだけでも文になり得る。例えば、メルハー＋ティプハ、メルハー＋ソフ・パスークというように組み合わせである。この形は大変多く使われているのできちんと覚えたい。また、メルハーは省略が可能である。結合符を取らない形もあるので、このグループの組み合わせ形は５通りとなる。

なおこの組み合わせには、その日の朗唱が終わる際に歌うもう一つ別の音形(終わりのメロディー)があることもしっかり覚えておきたい。後の楽譜で確認していただきたい。

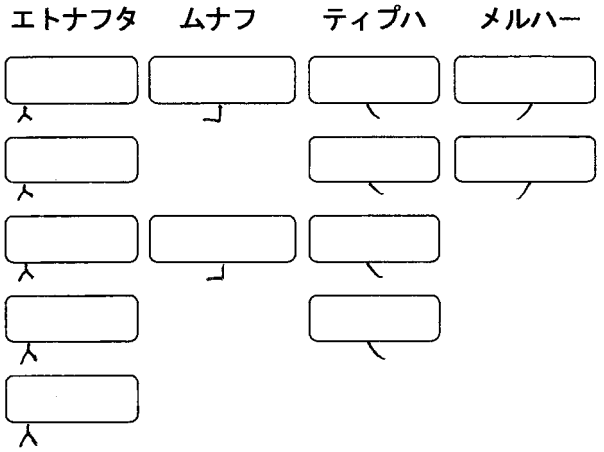


② Mercha ＋ Tipcha, Munach ＋ Etnachta

①で出てきたメルハーとティプハに、ムナフとエトナフタが組み合わさったもの。例えば、メルハー＋ティプハ、ムナフ＋エトナフタ というように組み合わされる。この中にも強い分離符のエトナフタがあるのでエトナフタ で区切れる。エトナフタとは一時停止や休みの意味があるので、文章の途中での句点(、)となる。先ほどと同様にメルハーとムナフは省略が可能である。結合符を取らない形もあるので、このグループの組み合わせ形は５通りとなる。

尚、結合符を取らないエトナフタだけの時(エトナフタが文頭にくる場合)は音形が変わるので十分に気をつけたい。後の楽譜で確認していただきたい。因みに、エトナフタで始まる文は創世記の中で８回出現していると思われる。その箇所を記しておく。創世記第 15 章 8 節、第 18 章 3 節、第 19 章 7 節、第 24 章 34 節、第 30 章 28 節、第 34 章 31 節、第 35 章 5 節、第 44 章 6 節。

特に初出の部分ではアブラムが神に尋ねている特別な箇所でもある。エトナフタが文頭にくるということは何か特別な場合に起こる特殊な形の一つなのだと考えられる。



ムナフが出たので話をムナフだけについて書くが、ムナフの組み合わせ方にはいくつかのパターンがあるようである。ムナフだけでも数パターンがあるように感じる。ムナフやムナフ・レガルメだけで３回連続して出てくる箇所もあるのである(例 創世記 第１章 21 節)。音形も様々なものがあり、とても複雑に感じる。

ムナフは次にくる結合符によって上行するか下行するかが決まるようである。ザケフカトンと結合すると素早く長２度下がって直ぐに戻ってくるし、エトナフタと結合すると短３度下行するが、それ以外はほとんど上行型になるのではないかと思う。

そして、その上行型がいくつもあるのである。言葉で書くと解りにくいのだが、いくつか挙げておく。後の楽譜では実際に私が聴いたものだけを記してあるので確認していただきたい(耳で聴いていないパターンも以下には含まれている)。

①長２度上行するだけのもの、②長３度して長２度下がる(最終的に長２度上がった①と同じ音で終わる)もの、③素早く長２度を２回上がって(つまり長３度まで到達し)直ぐ長３度下がり(最初の音に戻ること)更に直ぐに長２度上がる(結果的に長２度上がった形)もの→ムナフ・レガルメ、④低い方から完全４度上がって刺繍音のように素早く短２度下がりまた短２度上がり更に長２度上がる(ムの音を特別だと考えれば最終的に①と同じ音にはなる)もの、⑤完全４度上がって直ぐに短２度下る(最後の音は最初の音と長３度上がっ

た形になる)もの、⑥開始音が長２度高いG音から始まり短３度上がり短２度下がる(開始音から最終的に長２度上がった形)もの等である。

ムナフはザルカとセゴールのつながりでやや複雑な音形を取る。この先でも述べるのでその項目と重なってしまうのだが、ザルカとセゴールの前にそれぞれムナフが付くパターンである。最初にムナフ⑥で短３度上がり直ぐに短２度下がるパターンでザルカへ入り、その後にムナフ⑤の完全４度上がり短２度下がるパターンからセゴールへ続くという形である。

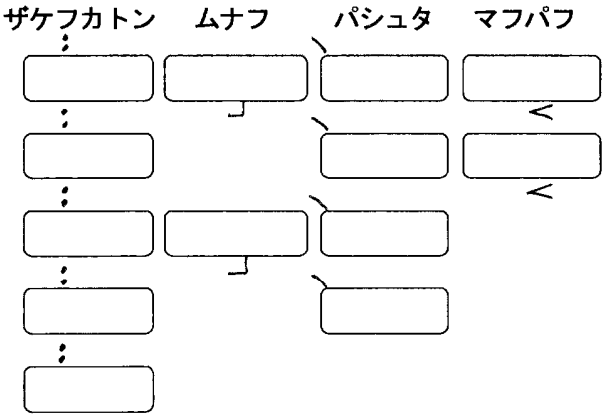
ムナフについてはまだまだ研究を続けないといけない。現段階ではムナフについて私の中で解明できていない部分が多々あり自分の未熟さを痛感している。しかし逆転の発想でこのことを考えれば、ムナフの使い方やパターンを知り尽くすことができるならばタアメー・ハミクラーの完全理解への扉へ極めて近づくことができるのではないだろうか。

③ a)Mahpach ＋Pashta, Munach ＋ Zakef Katon

マフパフとパシュタに、ムナフとザケフカトンが組み合わさったもの。ザケフとは上がるという意味で、カトンは小さいの意味であるので、ザケフカトンは小さく上がるという意味になる。因みに、後で出てくるザケフガドールは大きく上がるという意味になる。例えば、マフパフ＋パシュタ、ムナフ＋ザケフカトンというように組み合わされる。この場合もマフパフとムナフは省略が可能である。

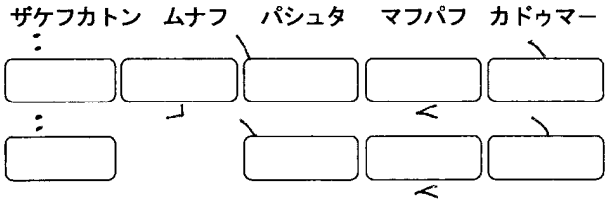
但し、マフパフは必ずパシュタを取るのでマフパフがある場合にはパシュタの省略はできない。マフパフ＋パシュタはセットで覚えたい。ということはマフパフ＋(ムナフ＋)ザケフカトンとはならないということである。何故このようなことを書いているのかというと、マフパフとイェティーヴは同じ記号を使うのであるが、付ける位置により名前が変わるのである。単語の前に付くとイェティーヴになり、単語中だとマフパフになる。イェティーヴは(ムナフ＋)ザケフカトンに必ず続くが、マフパフは必ずパシュタ＋(ムナフ＋)ザケフカトンに続くのである。つまり、イェティーヴの後にパシュタは続かないし、マフパフの後にムナフは続かないのである。この区別を知らないと本来イェティーヴなのにマフパフを付けてしまい記号の付け間違いが起きてしまう。このことはしっかりと覚えておきたい。

ヘブライ語聖書原文を見るとパシュタにカドゥマーが付いていてどちらだか解らないと思われる時があるがこれは全てパシュタであり、語中のカドゥマーのように見えるのはその語句のアクセント位置を表しているのである。パシュタは単語の左上だけのものと語中にも付いた２通りがあり、カドゥマーは単語の中上に１つだけ付いているものと理解していただきたい。このグループの組み合わせ形は次の５通りとなる。

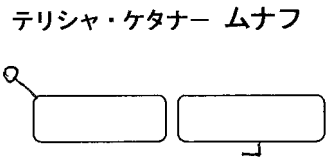


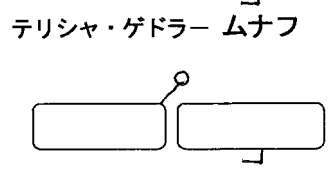
b)Kadma＋Mahpach＋Pashta,Munach＋Zakef Katon

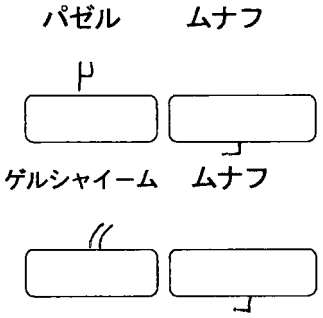
先ほどのマフパフ＋パシュタの前にカドゥマー(前へ進んでいく、東などの意)が付いた組み合わせがある。つまり、カドゥマー＋マフパフ＋パシュタ、ムナフ+ザケフカトンと言う組み合わせ形になる。ムナフやマフパフは省略が可能であるが、基本形をしっかりと覚えておきたい。



ムナフは、上記の他にムナフ+テリシャ・ケタナー、ムナフ＋テリシャー・ゲドラー、ムナフ＋パゼル、ムナフ＋ゲルシャイームのように組み合わせることができる。尚、ムナフは省略可能である。後述の楽譜で確認のこと。





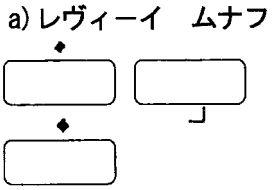


④ Munach ＋ Revii

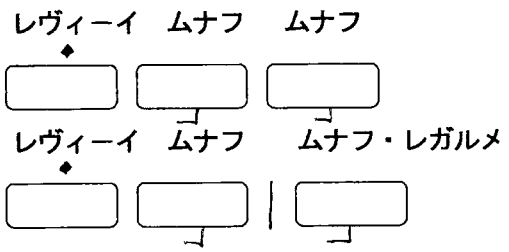
レヴィーイ(本来はレヴィーアであるが朗唱時にはレヴィーイとなる)の記号は単語の上に付くのだが、記号自体が小さいのと他の文字列の上に付く母音記号と見間違えてしまうこともあり意外と見落としがちな記号でもある。しかし、使用頻度は大変多くとても重要な記号なのである。実際の記号は点ではなく四角を４５度ずらした菱形のような形をした記号である。

組み合わせとしては、ムナフとレヴィーイが基本なパターン。この記号は文頭や文中でもよく使われる。

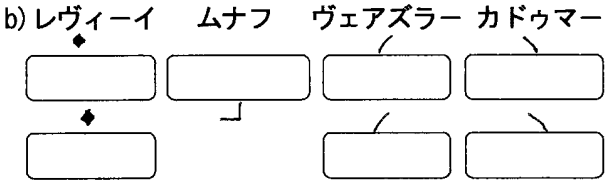
レヴィーイには第四という意味があるので音が４つ下がる音形である(音が伸びたところを第１音としてその後３つ下がって全体で４音になる)。ムナフは省略することが可能である。基本の組み合わせ形は２通りである。



一つ注意しておきたいのは、ムナフの前にもう一つ別のムナフやムナフ・レガルメが付くこともある。つまり、ムナフ＋ムナフ＋レヴィーイやムナフ・レガルメ(legarmeh)＋ムナフ＋レヴィーイとなることがある。これらの場合にはムナフの音や音形が変化するので注意が必要である。ムナフ・レガルメの音形は、全体の音数が１６分音符５個と８分音符１個の計６個になり、Ｆ音Ｆ音Ｇ音Ａ音Ｆ音Ｇ音のようになる。言葉で書くと解りにくいので後の楽譜で確認していただきたい。



更に付け加えるとこれらの前に、後で述べるカドゥマー(前へ進んでいく、東という意味)＋ヴェアズラー(離れていくという意味)がムナフ＋レヴィーアの前に付くことがよくあるので記しておく。



レヴィーイの後の組み合わせ形はいくつかある。レヴィーイの後に③や⑦、⑤やテヴィールだけが続くこともある。しかし、レヴィーイは最終的に音が完全４度下がるので(Ｄ音まで下がる)、このレヴィーイとイェティーヴ＋ムナフ＋ザケフカトンが組み合わされるととてつもない音の効果が発揮されることになるのである。朗唱時イェティーヴは上のＤ音から歌うことになるため完全８度(オクターヴ)上への跳躍がこの組み合わせで可能になるのである。この下のＤ音から上のＤ音へのオクターヴ跳躍はこの組み合わせでしか実現しないのである。レヴィーイとイェティーヴの組み合わせにより音楽的にもとても目立たせることができるし、音列も起伏が作れるので音列の流れが平坦になることを防いでくれるのである。それ故にこのレヴィーイ＋イェティーヴの組み合わせの意義はとても大きいと思う。この組み合わせは音楽的に極めて大きなアクセントを付けることができる。

⑤ Darga ＋ Tevir

今度はダルガーとテヴィールのグループになるが、少し変則的になるので注意したい。ダルガーとは階段やステップの意味があり、音形も上の音からゆっくり降りてくる感じがする。テヴィールは壊れたという意味や節の読みを中断するという意味がある。基本の組み合わせ形は、ダルガー＋テヴィールである。しかし、ダルガーの代わりにメルハーが使われることがある。その場合は、メルハー＋テヴィールである。その場合、音形も少し異なるので気をつけたい。ダルガーやメルハーは省略することが可能である。

但し、ダルガーは音の高いところ(Ｃ音)から始まりその高音を少し伸ばして順次進行で降りてくる数少ない記号なので、何か感情をしっかり伝えたい時や言葉を強調したい時、物事の大切な動作の時、感動の大きい時の朗唱に非常に有効だと思われる。聖書原文を見ても⑤が使用されている箇所やその前後では大切な言

葉を伝えているところが多いことに気づかされる。主に文頭や区切り後に出現していることが多いようだが、特にザケフガドールやゲルシャイーム、テリシャー・ゲドラー、テリシャー・ケタナー、カドゥマー＋ヴェアズラーの後にダルガー＋テヴィールやカドゥマー＋ダルガー＋テヴィールが置かれると更にその効果は増大する。

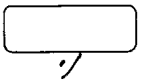
これらのことからダルガー＋テヴィールグループは聖書原文の内容理解を助けるためにもとても重要な記号グループの一つであると私は考える。

ダルガー単独の後にムナフ＋レヴィーイを続け、その後③－a などへとつなげていくパターンもよく見受けられる。またテヴィール単独でザケフガドールの後や文頭、エトナフタの後、ザケフカトンやレヴィーイの後に置かれるパターンも見受けられる。

a) テヴィール　ダルガー

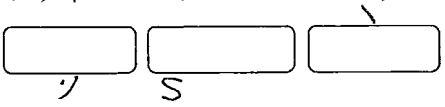
テヴィール　メルハー

テヴィール

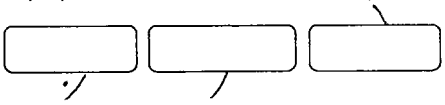


もう一つ頻繁に使われるのがダルガー＋テヴィールとメルハー＋テヴィールの前にカドゥマーを伴うものである。組み合わせは、カドゥマー＋ダルガー＋テヴィールまたはカドゥマー＋メルハー＋テヴィールである。これらも聖書原文中によく出現するので覚えておきたい音形である。その組み合わせとしてその前にテリシャ・ケタナーとテリシャー・ゲドラー、ゲルシャイームなどが組み合わされることが多いように感じる。

b) テヴィール　ダルガー　カドゥマー

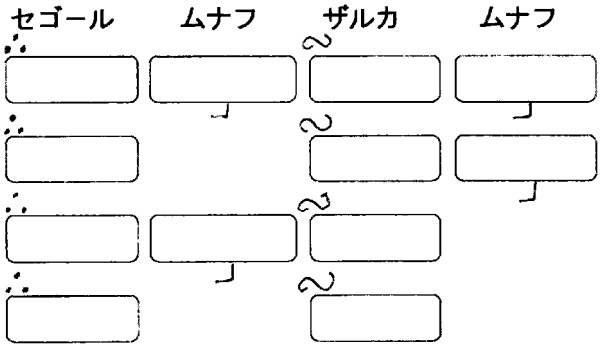


テヴィール　メルハー　カドゥマー



⑥ Munach ＋ Zarka, Munach ＋ Segol

ザルカとセゴールにムナフが組み合わさったもの。つまり、ムナフ＋ザルカ、ムナフ＋セゴールという組み合わせになる。ザルカは種をまくようにバラバラと散在するような音形である。セゴールは形からも想像できるようにブドウの一房という意味である。朗唱時には、この組み合わせの音が一番覚えにくいと思われるので特に注意しておきたい。後述の楽譜で確認していただきたい。ムナフは省略することが可能である。ザルカとセゴールは切り離しや省略をしないで１セットとして覚えたい。このグループの組み合わせ形は次の４通りとなる。



⑦ Yetiv ＋ Munach ＋ Zakef Katon

イェティーヴ(休んで、座ってという意味)に、ムナフ＋ザケフカトンの組み合わせた形である。この組み合わせもよく使われる。ムナフは省略することが可能である。イェティーヴは最高音から始まる唯一の音形である(楽譜ではG音が先に付いているが朗唱時には歌わない)。最高音のD音は当てるだけで直ぐ次のC音に移るのだが高いD音から始まる音形なのでとても目立つ音である。

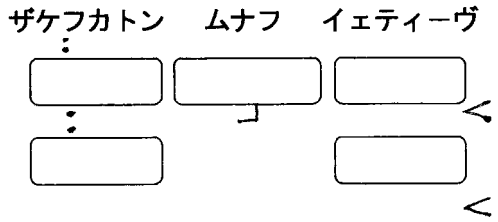
この記号は１章に１～２回程度しか出現しないためそれほど頻繁に使われる記号ではないのだが、その音形と音の高さ故に人に何かを喚起したり、並列して伝えたり、命令時などに利用してその部分を目立たせることができる記号であるとも言える。イェティーヴの前にレヴィーイを使えば歌唱時には完全８度上への跳躍(オクターヴ跳躍)することが可能になりとても目立つ形になる。

またイェティーヴが比較的近いところや一文中に２度も出てくれば相当に目立つことになるだろう。一文中にイェティーヴが２度出てくる例が創世記に３箇所あるので記しておく。創世記 第 11 章 10 節、第 28 章 15 節、第 32 章 20 節。

楽譜で注意していただきたいことが一つある。イェ

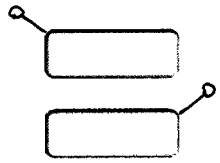
ティーヴという記号だけを歌うときはタアメー・ハミクラー・テーブル楽譜の通りなのだが、ヘブライ語聖書原文の朗唱時にはイェティーヴが付いた言葉は楽譜に書いた最初の音(G音)は歌わず最高音(D音)から歌うということなのである(つまりD音→C音のみ)。この点はとても紛らわしいので特に気をつけたい。

イェティーヴの組み合わせは、イェティーヴ+(ムナフ+)ザケフカトンになる。イェティーヴ記号の後にもしもパシュタが続いていればそれはイェティーヴではなくマフパフであろうということである。



⑧ Telysha Ketanah, Telysha Gedolah, Zakef Gadol, Pazer, Kadma Veazla, Azla Geresh, Gershayim Telysha Ketanah, Telysha Gedolah

Telysha Ketanah, Telysha Gedolah



テリシャ・ケタナー

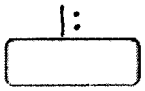
テリシャー・ゲドラー

テリシャ・ケタナーとテリシャー・ゲドラーであるが、テリシャーとは切り離されたという意味で、ケタナーはカタン(小さい)から来ているのでテリシャ・ケタナーとは小さく切り離されたという意味になり、テリシャー・ゲドラーは大きく切り離されたという意味になる。これらは文頭やエトナフタ後などによく置かれる。またムナフにつながったり、パゼルに続くことがよくあるようだ。

テリシャー・ケタナーはパゼルの後によく出現し、その後に③−bや④−b、⑤−bに続くことが多いように感じる。

テリシャー・ゲドラーは前にパゼルやムナフが置かれたり、後にはダルガー+テヴィールやカドゥマー・ヴェアズラー、アズラーゲレッシュ、ゲルシャイームが続くことがよくあるように思われる。因みに、テリシャー・ゲドラー+ゲルシャイームが比較的近い範囲内に3つ続く箇所が創世記にあるので記しておく。創世記 第18章28節、第18章30節、第18章32節。

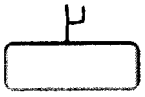
Zakef Gadol



ザケフガドール

ザケフガドールはザケフカトンのところで説明した通り大きく上がるという意味であるので、サゲフカトンよりも高音を少し長く伸ばすことになる。文頭やエトナフタで区切られた後、またはムナフ+ザケフカトンの後などによく出現する。創世記に一文中にザケフガドールが3つも出現する箇所があるので記しておく。創世記 第20章4節。また連続で2回出現する箇所も記しておく。創世記 第26章23節、第33章5節。

Pazer



パゼル

パゼルは豪華な、派手なという意味で音数がたくさんあるということと、音も最高音まで達して下がってくる音形になっていて派手な雰囲気がある。テリシャー・ケタナーやテリシャー・ゲドラーの前に置かれることが多いように思われる。

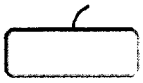
因みに一文中に2回連続して出現する箇所が創世記にあるので記しておく。創世記 第37章33節。ここではヤコヴがイサクから祝福を受けた後、入れ替わりに狩から戻って食事を持ってきたエサウに対してイサクが発した箇所である。恐れと驚きがとても大きかったのだろうということがパゼルの連続記載により十分に表現されていると私には感じられる。創世記全体ではパゼルは29回使用されていると聞いている。

Kadma Veazla

カドゥマー・ヴェアズラー

カドゥマー・ヴェアズラーは前にも説明した通りでカドゥマーが前に進んでいくという意味や東という意味で、ヴェアズラーは離れていくという意味である。文頭や区切り(エトナフタやレヴィーイ等)後に使われる他、前にテリシャー・ケタナーを伴うことが多く見受けられる。またこの記号の後にはムナフ+レヴィーイやマフパフ+パシュタ+ムナフ+ザケフカトン、ダルガー+テヴィール等につながることが多いように思われる。このグループの中では聖書原文中に一番多く出現してきている。

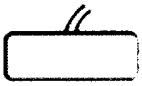
Azla Geresh



アズラー・ゲレッシュ

アズラー・ゲレッシュは離れていって追い払うという意味になり、節を中断する形になる。文頭や、エトナフタ後に使用されるととても印象的になる。音も下から最高音へ向かって歌われ、高音で終わるためとても目立つ音形である。文頭や区切り後に使われることが多いように感じる。頻繁には出現しないのだが、その音形故に重要な言動や大切なものを目立たせる時などに使用されることが多いのではないかと思われる。私が見た限りにおいては特に物語の場面の重要な動詞に割り当てられていることが多いように感じた。因みに私が数えた限りでは、創世記で２８回使用されていると思われる。

Gershayim



ゲルシャイーム

ゲルシャイームはゲレッシュの複数形であり２本線があるように音が上行してまた下がり更に上がっていくという音形になっている。後述の楽譜で確認のこと。ゲルシャイームもいろいろな組み合わせがあるようだが、次には２つの組み合わせについて書いてみる。

ゲルシャイームの前にテリシャー・ゲドラーを伴うことが多いように感じる。テリシャー・ゲドラーの部分を参照のこと。ここでは一文中にゲルシャイームが２回出てくる箇所が創世記にあるので記しておく。創世記 第29章2節。

ゲルシャイームの後に続けてダルガー・テヴィールやカドゥマー＋ダルガー・テヴィールが続くととてもよく目立ち華やかで且つ説得力が強まる印象が私には感じられる。一例になるが、創世記 第38章25節の後半に使われている。ユダがタマルに渡した印章・紐・杖をこれらが誰のものかどうか確かめてくださいというタマルの言葉である。

ゲルシャイームの付いている箇所をよく読むと「それ故に」や「神のため」、「私にとって」、「そして見よ」など何か理由や原因となる事物や場所・動詞等に付けられていることが多いように感じられる。

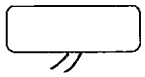
⑨ Shalshelet, Merchachefulah,
Yerach Ben Yomo, Karne Parah

ここに載せたグループの記号はこのタアメー・ハミクラー一覧表の中でも出てくる回数の少ない記号である。トーラー中に、シャルシェレットは４回(創世記に３回 第19章16節・第24章12節・第39章8節、レビ記に１回 第8章3節)、メルハー・ケフラーは５回(創世記に１回 第27章25節、出エジプト記に１回 第5章15節、レビ記に１回 第10章1節、民数記に２回 第14章3節・第32章42節)、イェラハ・ベン・ヨモ(１日分の月または月のある日の意)とカルネー・パラー(記号の形のように「牛の角」の意)は民数記 第35章5 節に１回ずつだけ、それもイエラハ・ベン・ヨモ＋カルネー・パラーと連続して出てくる大変珍しい形の記号である。音もとても珍しい音形で且つ音数もとても多く全体的な形も長いものになるので、逆にこの音形が出てくるとすぐにこの記号だと判明すると思われる。

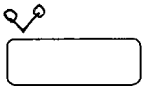
Shalshelet

シャルシェレット

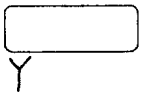
シャルシェレット(鎖の意味)はほぼ同じ特殊な音形を３回繰り返すので音形も長い部類に入る。その音形からいろいろな状況や心理を表していると考えられる。例えば、何かに迷っていてなかなか決めらない状態(ロトの心理)を表していたり、主人イサクの妻を探しに行った僕の切なる願い(この井戸の前で妻となる方を見つけられるように強く願う)だったり、悪の誘いを拒絶する強い気持ち(ヨセフの清さ)を表す時に使われている特殊な音形なのである。音符も４連符と３連符を３回も繰り返している。



メルハー・ケフラー



カルネー・パラー



イェラハ・ベン・ヨモ

3.4 タアメー・ハミクラーで原文を見てみる

実際に原文を見てみよう。今回は比較的長い文章を創世記から選んでみた。しかし、タアメー・ハミクラーで文章を眺めて見ると数個の節(構文)パターンが入っていることが分かると思う。それらの構文構造が分かればそれほど大変ではないことも理解できると思う。次の文章は、創世記 第８章２１節である。

内容は…大洪水の後、ノアが祭壇で捧げ物をした後に神が自分に語った言葉である。

8:21 בראשית WLC

וַיָּרַח יְהוָה אֶת־רֵיחַ הַנִּיחֹחַ

芳香の　匂いを　主は そして嗅いだ

וַיֹּאמֶר יְהוָה אֶל־לִבּוֹ לֹא־אֹסִף

私は再び～しない　自分の心に　主は そして言った

לְקַלֵּל עוֹד אֶת־הָאֲדָמָה בַּעֲבוּר הָאָדָם

人　の故に　土地を　再び 呪うことを

כִּי יֵצֶר לֵב הָאָדָם רַע מִנְּעֻרָיו

彼の少年期から　悪い　人の 心の 衝動は 何故なら

וְלֹא־אֹסִף עוֹד לְהַכּוֹת

撃つことを もう一度 そして私は再び～しない

אֶת־כָּל־חַי כַּאֲשֶׁר עָשִׂיתִי׃

私がした　～のように　全ての生き物を

さて上記の文中にある節(構文)を型で解説してみよう。１行目は構文⑥である。切れ目はセゴールの後。

セゴール＋ムナフ＋ザルカ＋ムナフ

２行目は構文④-b にテリシャー・ゲドラーが続いたもので、切れ目はレヴィーイの後。

テリシャー・ゲドラー＋レヴィーイ＋ヴェアズラー＋カドゥマー

３行目は構文③-b である。前のテリシャー・ゲドラーから一連と捉える。

ザケフカトン＋ムナフ＋パシュタ＋マフパフ＋カドゥマー

４行目はテリシャー・ゲドラーにムナフが付いて、その後に構文⑤-a が付いて構文②のティプハとエトナフタである。

エトナフタ＋ティプハ＋テヴィール＋ダルガー＋ムナフ＋テリシャー・ゲドラー

５行目は構文⑤-a にメルハーである。

メルハー ＋ テヴィール＋メルハー

６行目は５行目最後のメルハーから構文①である。

ソフ・パスーク＋メルハー＋ティプハ

以上が節(構文)としての捉え方の説明である。文末のソフ・パスーク以外で一番の区切りは４行目最後のエトナフタである。つまりエトナフタ迄が前半で、その後からが後半である。

更に前半を詳細に分割すると、１行目最後のセゴールで区切り、２行目レヴィーイで区切り、３行目最後のザケフカトンで区切り、４行目最後のエトナフタで前半が終了となる。

１行目で神は芳香の匂いを嗅いだ。２行目最後のレヴィーイで自分に語った…テリシャー・ゲドラーから３行目最後までのことを再びしないと、最後のムナフとザケフカトンの言葉ゆえに。４行目がその理由である。ムナフとダルガーとテヴィールで理由の元となることを伝えているのである。そして、５行目のメルハーとテヴィールで再びしないと言い、６行目の内容を。となるのである。

後半もメルハー＋テヴィールを使って私はもう二度としないと言っている。前の行のダルガー＋テヴィールと同属のメルハー＋テヴィールが使われていることにも注目したい。メルハーから最終行では再びしないと決意した内容が書かれている。構文⑤のメルハー＋テヴィールと構文①が省略されない形で現れている。

上記に記したとおり、大切な部分では内容に合った味付けがされているのである。例えば、ムナフ＋ザルカ＋ムナフ＋セゴールやカドゥマー・ヴェアズラー＋レヴィーイの目立つ形、テリシャー・ゲドラーとカドゥマー＋マフパフ＋パシュタ＋ムナフ＋ザケフカトンの省略無しの形、テリシャー・ゲドラー＋ムナフ＋ダルガー＋テヴィール、メルハー＋テヴィールによる組み合わせなどである。特徴の有る音形と音の高い音形などが重要な言葉に使われていることに気づいていただけただろうか？それぞれの部分の言葉と対応させて読んで音を感じていただきたい。

このような長文でもタアメー・ハミクラーの節(構

文)を看破して読めば､比較的すんなり読めると私は確信している。節(構文)に付いた音の流れを聴いていると、まるであたかも講談や一人芝居を聞いているかのように私には感じられるのである｡あなたにはどのように聞こえ、どのように感じるだろうか？タアメー・ハミクラーを読んで音の流れを是非とも感じていただきたい。

3.5 現時点で私の中でまだ解明できていないもの

ムナフの使い方もそうだが、今までに挙げていない組み合わせもいくつか存在する。例えば、カドゥマー＋メルハー＋パシュタ＋ザケフカトン(創世記 第4章25節、第8章1節など)、カドゥマー＋メルハー＋ザルカ＋ムナフ＋セゴール(創世記 第3章14節、第30章16節)、カドゥマーの無いメルハー＋ザルカ＋ムナフ＋セゴール(創世記 第20章3節､第22章5節)という組み合わせである。これらはカドゥマー＋メルハー＋テヴィールとは形が異なっているので、メルハーの使い方がより詳しく知ればもう少し解明できるのではないかと思われる。

また１単語中(ハイフンで繋がった語も 1 単語として考える)に２種の記号組み合わせを持つものも存在する｡ムナフ＋ザケフカトン(創世記に35回程)やカドゥマー＋ザケフカトン(創世記に24回程)などである。朗唱を聴いてみると通常時より後半が少し遅めになっているようにも感じる。その他にカドゥマー＋ヴェアズラー、ムナフ＋エトナフタの組み合わせ等も１単語内に存在することが見受けられる。

また更に１単語全てにレヴィーイのような記号がたくさん付いた単語も存在する。これはきっと何かしらの意味(解釈上かと思われる)がある言葉だと思われるのだが、まだ私には理解できていない。このレヴィーイに似た記号連記されている語は聖書全体で１５個程度あると聞いている。例えば、創世記 第18章9節、第33章4節などである。

3.6 高音で特に目立つ記号の組み合わせ

普通の文章なら①だけや、①及び②の組み合わせだけで十分読めるである。それ以外の構文が使われているということはそこに何かしらの変化を付けたいからだと思う訳である。その一番の極みはタアメー・ハミクラー・テーブルの最後の４つであろう。極めて特徴的な音形であり、出現箇所も少ない。これらが出現することは本当に稀なことなので今回は置いておくとして、それ以外の記号の組み合わせで音高的に特徴的なタアメー・ハミクラーについて考えてみる。ということは、タアメー・ハミクラー・テーブルのイェティーヴまでの記号で考えることになる。

音高で特に目立つ場合というのは音が特出してくることやずっと低音やずっと高音が続くことだと思うが、タアメー・ハミクラー・テーブルの中にずっと低音やすっと高音となる記号の組み合わせはないので、組み合わせによってある程度高音が続いたり、急に高くなる記号の組み合わせを述べることにする。

まずはその記号一つ単独である程度目立つ記号もある。例えば、アズラー・ゲレッシュや文頭のエトナフタ、ザケフ・ガドール、パゼル、テリシャー・ケタナー、テリシャー・ゲドラー、ゲルシャイーム、イェティーヴであろう。アズラー・ゲレッシュとエトナフタはそれだけで特殊な形なので除いて考える。それ以外は他の記号と組み合わさると更に目立つ音形になるのである。

まずはイェティーヴであるが、イェティーヴは単独で使われることもあるがイェティーヴ＋ムナフ＋ザケフカトンの形で使われることが圧倒的に多い記号である。これだけでも上のＤ音１回とＣ音が２回出てくるので十分に目立つ。更にイェティーヴの前にレヴィーイが置かれるとＤ音からＤ音への完全８度上行跳躍が生まれるのである。Ｄ音への完全８度上行跳躍この組み合わせ以外にはできないので、低音から高音への急激な跳躍の中で最も目立つ組み合わせとなる。

ザケフ・ガドールは切れ目に出てくる記号である。出現頻度としてはムナフ＋ザケフカトンの後に出てくることが多い。これだけでもＣ音が２回程出てくるので十分に目立つ。その後に更にカドゥマーやパシュタが続けば上のＣ音が続けて出てくることになるので余計に目立つし、ダルガー＋テヴィールが続けば少し長めの高いＣ音が２回続くことになるのでとても目立つ。イェティーヴ＋ムナフ＋ザケフカトンが続けば短いとはいえ最高音のＤ音とＣ音が出てくるのでこれも目立つことになる。

ゲルシャイームは音高的にはそれほど高くはないのだが、Ａ音が２度出てくるので前や次に続く記号によっては目立つことになる。前に来るのはテリシャー・ゲドラーであるが、組み合わせは多くはないがこれらだけでは音は高くならない。ゲルシャイームの後にカドゥマー＋ダルガー＋テヴィールやダルガー＋テヴィ

ールが続くととても目立つ組み合わせとなる。

テリシャー・ケタナーは最後にC音に降りるので次に上がる音形の記号が続くととても目立つ形が生まれる。例えば、カドゥマー＋ヴェアズラーやカドゥマー＋ダルガー＋テヴィール、カドゥマー＋マフパフ＋パシュタ＋ムナフ＋ザケフカトンが続くととても目立つことになる。テリシャー・ケタナーの後にカドゥマー＋ヴェアズラーが出現することはとても多い。

テリシャー・ゲドラーは先ほど述べたゲルシャイームが続くことがある。またテリシャー・ゲドラーの後にムナフ＋ダルガー＋テヴィールやカドゥマー＋ダルガー＋テヴィールが続くことによってかなり目立つ。またテリシャー・ゲドラーの前にパゼルが置かれてからのカドゥマー＋ヴェアズラーやカドゥマー＋ダルガー＋テヴィール、カドゥマー＋マフパフ＋パシュタとなると非常に目立つ組み合わせとなるのである。他にはカドゥマー＋マフパフ＋パシュタ＋ムナフ＋ザケフカトン＋ザケフガドールなどが続く。

これらの組み合わせは幅広い跳躍を伴ったり、高いD音やC音を１～２回以上導くことになり、高音域で朗唱する時間や回数が多くなる。またそれらの記号群は、何かを強く訴えたいときや印象に残るような大事な場面・大切な言葉などによく出現しており、その辺りに重要なことが起きていることが多いと感じている。逆に言えば、これらの記号が組み合わされて多く使われている箇所というのは何かしら印象に残る大事な場面や大切な言葉及びそのような重要な場面等を伝えている箇所ではないかと考えることができるのではないか思うのである。このことはヘブライ語聖書の内容理解と解釈の上でとても関係が深いことだと考える。

3.7 タアメー・ハミクラー記号の楽譜化を探求

タアメー・ハミクラーと向き合って３年以上経ち、朗唱方法(フレーズパターン)もだいぶ見えてきて、楽譜を書こうとしている現在…さてどうのように楽譜に書いたら一番よいのだろうか。当然、一般の人でも歌えるような音の高さも考慮して記譜しないといけないだろう。ということは調号もなるべく少なくした方がよいだろう。調号を付けたとしても１つくらいにしないと厳しいだろう。古代の音なので調性など気にしないで調号を付けないで書く方がいいのかもしれない等など様々考えてしまうのである。また実際に音符を書くときにはアクセント位置が拍の頭にくるようにした方が良いだろう等など。どのように書けば判りやすく正しく聞こえるかを本当に思い悩んでいた。

というのも、現在手元にある楽譜類は全て音高も拍子もバラバラなのである。リズムもだいぶ異なっている箇所もある。あるものは２拍子で書かれていたり、３つの音の塊であったり、４つの音の塊だったりする。だから記号毎に違う拍子になっているものも多く見らる。またそれらを探し集めたところも違うし、書き手も違うのだから書き方がバラバラなのは当然と言えば当然ではあるが…。口伝で伝承されてきたものを楽譜として書くということは大変なことなのである。しかし、何か共通するルールや術がないものだろうかとずっと考えた。古代の歌い方や記譜法なのだけれども何かしらのルールのようなものがあるのではないかと思ったのである。テキストを見て何度も歌い、反芻して唱えてみたりした。音源も何回も聴いてみた。

何度もタアメー・ハミクラーをつなげて歌っていると…これは同じリズム感にはめることはできないか？同じ拍子で統一できないか？いずれかの拍子でまとめられないだろうかと感じるようになった。規則性と言えばテンポか拍子感であろうから、この場合は拍子感ということになる。歌いやすくて覚えやすいのはどれだろうと考えた。勿論、小節線を付けないということも大いにあり得る。そうすべきなのかもしれないが…。

タアメー・ハミクラーを歌った音源を聴いたり、楽譜をよく見ると３連符や４連符、５連符なども見受けられる。シャルシェレットやカルネー・パラーにいたっては４連符と３連符が交互に歌われるかのように聞こえる。４連符と３連符なら４分の２拍子なら３連符だけで解消できる。８分の６拍子だと４連符が必要になってくるが、さすがに８分の６拍子の中に４連符というのは見慣れていないし少し厳しい感じもするので見やすさから考えると４分の２拍子の方が良いのだろうと思う。

しかし、３つの音の塊が続くこともあるし、４つの音の塊が続くこともある。とはいえ４拍子系の４分の４拍子や８分の１２拍子などにするのはかなり無理があるようにも感じた。また、この記号群は切れないのでここまではつなげて歌うべきだろうなども考えると何拍子にしたらいいのか迷った。そして迷う度に古代のものには拍子を付けてはいけないのかなとも感じたりした。

しかし、ものは試しで無理矢理にいくつかの拍子の中にタアメー・ハミクラーの音を当てはめて歌ってみ

たりした。アクセント位置を考慮すると語群の中でも拍子を変えた方が分かりやすいと思われる記号群も見受けられた。４つの音の塊だけで進める音形と、３つの音の塊で進む音形があるのである。そして、先ほども触れたが４つの音の塊と３つの音の塊が交互に出てくる場合もある。そうすると拍子の可能性としては、４分の２拍子か８分の６拍子で統一できれば一番だが果たしてそうして良いものか迷ってしまった。

また記号が相当量あるので音の量もそれなりにある。当然、息継ぎ無しで歌いきることは不可能である。歌うとすれば塊になっている語群で歌うことになるのである。そんな中、繰り返し歌うことを続けていた私の中で朧気ながらある形が見えつつあった。

タアメー・ハミクラーのテーブルはそれぞれの型というか節(構文)を記号で示し、朗唱するためのメロディーを覚えるための手助けとなる。一部分だけ読むのではなく、全体を覚える必要がある。すなわち、歌い出したら最後まで歌いきることで全体の流れが見えるのである。そうであるなら楽譜も一つの節の区切りで分けることなく最後まで一貫して歌われるものでならないのではないかと考えた。その考えの上で楽譜を書くならば、楽譜は拍子や速さが変わらないことや見やすさが大切なのではないかと考えた。後の楽譜はこの考え方に基づいて作成してあることをここに記しておく。音源と多少違っている部分もあるかもしれないが、アクセント位置の言葉が拍頭にくるように一定の流れで記してみた。私の記した楽譜でも十分に理解できるものと判断し記した次第である。

タアメー・ハミクラーのテーブルに書かれている記号をカタカタだけにしてみた。次の通りである。アクセント位置は字体を変え強調文字にしてある。更に、「、」で区切られているのが一塊で歌われるものである。

「カドゥ**マー**・ム**ナ**フ・ザル**カ**・ム**ナ**フ・セ**ゴー**ル」、「ム**ナ**フ・ム**ナ**フ・レヴィ**イー**イ」、「マフ**パ**フ・パシュ**タ**・ム**ナ**フ・ザケフカ**ト**ン」、「ザケフガ**ドー**ル」、「メル**ハー**・ティプ**ハ**・ム**ナ**フ・エトナフ**タ** 」、「パ**ゼ**ル」、「テリシャー・ケタ**ナ**ー」、「テリシャー・ゲド**ラー**」、「カドゥ**マー**・ヴェアズ**ラー**」、「アズラー・ゲ**レ**ッシュ」、「ゲルシャ**イー**ム」、「ダル**ガー**・テ**ヴィー**ル」、「イェ**ティー**ヴ」、「メル**ハー**・ティプ**ハ**・メル**ハー**・ソフ・パ**スー**ク」、「シャル**シェ**レット」、「カルネー・パ**ラー**」、「メル**ハー**・ケフ**ラー**」、「イエラハ・ベン・ヨ**モ**」。

最後の方の記号で民数記第３５章５節に１回ずつだけ出てくるイエラフ・ベン・ヨモとカルネー・パラーはその箇所に連続して出てくるので、シャルシェレットのあとに先ずメルハー・ケフラーを入れて、そのあとにイエラフ・ベン・ヨモとカルネー・パラーを書く方が歌う回数や順番などから考えても理にかなっているのかもしれない。楽譜では入れ替えて記してあるので確認していただきたい。

4 タアメー・ハミクラー・テーブル及び楽譜

4.1 タアメー・ハミクラー・テーブルと一覧表

この論文を執筆することになってからＭＳワードでヘブライ語を書けないかいろいろ調べてみたがなかなか見つけることができなかった。「ヘブライ語対訳で聖書を読む会Ｉ」に参加しているときに谷内先生に尋ねてみた。谷内先生はヘブライ語ワープロソフト「ダフカライター」というソフトをご使用らしくワードでのヘブライ語入力についてはご存じなかった。私もその「ダフカライター」を購入したい旨を伝えたが、最近その出版元と連絡を取っていないので入荷がいつになるか解らないとのことだった。

同会の休憩中に Windows でヘブライ語入力の方法について探している話をしていると同席の会員様から Windows のＭＳワードでヘブライ語の入力が可能であること聞いた。話を聞いていると母音表記(ニクダー)も入力ができるという。表示及び入力方法を教えていただき、早速自宅で試してみた。ヘブライ語は入力ができたが、何故か母音表記等が入力できなかった。

次の会の時にもう一度方法を尋ねてみたら、なんと右の Alt キーを押しながらでないと母音記号は入力できないということらしい。自宅のＰＣキーボードには右の Alt キーが無かったので自宅ではできなかった。職場のＰＣキーボードを見てみると右の Alt キーがあったので試してみると入力することができた。更にタアメー・ハミクラー記号も入力することもできた。

しかし、残念なことに母音記号やタアメー・ハミクラー記号だけを色分けしたりする機能がなかったのである。つまり、ＭＳワードではヘブライ語アルファベットと母音記号等(タアメー・ハミクラー記号も含む)は一つの文字として認識しているため色分けすることができないということらしい。残念無念である。というのも、私はタアメー・ハミクラー・テーブルや分離符・結合符一覧表で母音記号やタアメー・ハミクラー記号

のその部分だけを浮き上がらせて表示させたかったのである。そうすることでこの記号のことを指しているということが視覚的にすぐに解るからである。

この事実が判明したため、再度谷内先生に「ダフカライター」購入のお願いをする話をした。論文でタアメー・ハミクラーの研究をしていてタアメー・ハミクラー記号等を色分け表示したいのだと伝えた。すると谷内先生は、以前に私が「ヘブライ語対訳で聖書を読む会」の中でタアメー・ハミクラーについて説明をした時に谷内先生が用意してくださった資料とほぼ同じではないですかと言われた。言われてみればその通りなのである。そこでその資料のこの記号部分を色分けし、いくつかの部分を修正していただけないかというお願いをした。谷内先生は私のお願いを快諾してくださった。そして、私の我が儘を聞いてくださった。何度も何度も修正を繰り返してくださったのである。ここに掲載したヘブライ語によるタアメー・ハミクラー・テーブルと分離符・結合符の一覧表は私が谷内先生にお願いして再作成していただいたものなのである。本当にありがたいことでいくら感謝しても足りないくらいである。

また今回の印刷が白黒表示だと判って記号の色分けを赤と黒から黒と灰色に再変更していただいた。文字列の上下左右に黒く書かれているのがタアメー・ハミクラー記号で、灰色で表示されているのが母音記号である。一覧表とともに見比べて確認していただきたい。

4.2 タアメー・ハミクラー・テーブルの通唱楽譜

楽譜は、トーラーのタアメー・ハミクラー・テーブル記号を音符に直したものでアシュケナズィーと呼ばれる中央ヨーロッパ方式による歌い方を楽譜化したものである。歌い始めから歌い終わりまで私なりに同じ拍子で統一して書いたもので、ヘブライ語のアクセントが拍頭にくるように現代風に設定して書いている。是非、最後のフェルマータ記号まで続けて歌っていただきたい。この歌い方を覚えればモーセ五書を朗唱できることになるはずなのである。この音形を原文に乗せて歌えばほぼ８割以上の精度で朗唱が可能であろう。残りの２割弱はといえば特殊な言葉や箇所、アクセント等の変化で生まれる違いであろうと考えられる。

音の高さ(音域)も一般の人がそれほど苦しくなく歌える高さまでで書いたつもりである。音部記号はト音記号。音域はピアノの中央ハ音(ト音記号の下第一線のＣ音)からオクターヴ上のニ音(ト音記号第４線のＤ音)までとした。

また基本的な音を普通の音符で書き、装飾的な音は装飾音で記したつもりである。装飾音有りで歌っても装飾音無しで歌ってもどちらでも良いと思う。また記号の組み合わせによって多少音形が変わることがあるのでいくつか記しておいた(ムナフやエトナフタ等)。

勿論これが決定版であるはずはなく、国や地域・地方によっては少し違う旋律で歌われていることもあるのでこれは歌い方の一つの方法であると思っていただきたい。

5 まとめ

5.1 タアメー・ハミクラーを知ってから

私はキリスト教徒ではないし、教会等で聖書について語るためにこの学びをしている訳でもない。ただ聖書を読み始めたときに訳の違いがあり、原文はどのように書いてあるのかが知りたかったのである。原文のヘブライ語を読んでいると文字列の上下左右に不思議な記号が付いていることに気づき、それがタアメー・ハミクラー記号だと知った。その記号は朗唱の味付けであり、文節の区切りやアクセント位置、歌うための記号であると教えていただいた。私の専門は声楽なので、なんと言っても歌うための記号であるということがとても気なったのは言うまでもない。

ヘブライ語聖書を読み始めて１年目にその読み方を知り、２年目後半にA 先生より朗唱の仕方を教えていただく機会を得て、どのように歌うのかを口伝で体感した。しかし、朗唱の集中講義を受講してもなかなか思うように理解できなかったのである。体感したものを理解するために何か仕組みのようなものがあるのだろうと必死にもがき探し求めているときに谷内先生から楽譜の断片の集合体を教えていただいた。更に聖書朗読に参考になるウェブサイトも知ることができた。そのウェブサイトで見つけた楽譜と谷内先生からいただいた楽譜、A 先生から口伝で教えていただいた音形を合わせてみると次第に形が見えてくるようになったのである。なんと言っても楽譜の情報量はとても多いということが今更ながらよく分かった。それにコーレンの聖書の巻末付録の楽譜を見たことで更にその輪郭がより濃く見えてきたのも事実である。また同じ組み合わせでも音形に若干の違いがあることも確認することができた。

5.2 タアメー・ハミクラーの楽譜

楽譜についてはいろいろ考えた結果、全ての節(構

文)を繋げて一連の通唱として書いてみた。初めから最後のフェルマータ記号(イタリア語でコローナ記号)まで続けて歌っていただき、節(構文)の形を覚えていただきたい。結局のところ、それらの節(構文)の集合体がこのタアメー・ハミクラー・テーブルなのであるから。記号とメロディーが一致すれば、その記号の部分の言葉にその記号のメロディーを付ければ良いのである。それが味付けなのである。

今回、ヘブライ語聖書に接していてその文章をしばらく見ているとその中にある一定の法則性があるように見えてきたことがあった。この記号の後にはあの記号がよく続くなあと。勿論、その逆のこの記号の後にはあの記号は続かないなあとも。分離符と結合符の一覧表を見ながらそんなことを繰り返し考えているうちに少しずつ記号同士の接続の流れが見えてきたのである。それらの組み合わせの基本の流れについて現段階で判ってきたものについて述べてきたつもりである。

記号同士の接続の流れが少し見えてきた時にふと思った。これを作った人達はなんと凄いことをしていたのかと。それも今から３０世紀以上も前にヘブライ語原文が作られ、同時期かその後にタアメー・ハミクラーが付けられたとしても今の楽譜のできる数世紀から１０世紀以上も前に既にこのタアメー・ハミクラー記号を使用して朗唱していたのであろうことを考えると正に驚愕なのである。古代の人達の聖なる絆を次世代へ伝承する手段だったのかもしれないが、見れば見るほど本当によくできているのである。素晴らしい限りである。そんなに素晴らしく神聖なものを研究することができている今の自分と、その自分を取り巻く全ての環境に感謝すべきなのだと強く感じた次第である。

今後もタアメー・ハミクラーの研究を続け、次のステップへ進んでいこうと思っている。

今回のタアメー・ハミクラーの研究が聖書ヘブライ語の解釈理解を更に深め、またトーラーを朗唱するための参考としていただけるのなら幸甚である。

謝辞

今回の論文を執筆するに当たり、(株) ミルトス代表取締役(社長)であり「ヘブライ語対訳で聖書を読む会」主宰で且つ講師でもある谷内意咲様にはタアメー・ハミクラーについて大変貴重な資料をいただきました。またヘブライ語の発音や英語表記の仕方等などいろいろとご教授をいただきました。更にヘブライ語のタアメー・ハミクラー・テーブル及び分離符・結合符一覧の作成依頼も快諾してくださいました。これらのことは私の拙い論文の内容理解を推し進め、トーラーのタアメー・ハミクラーを知りその知識を深める役割も果たしてくださっています。また「ヘブライ語対訳で聖書を読む会Ｉ」にご参加の会員様方からＭＳワードでのヘブライ語の入力方法及び母音表記等の書き方、スマートフォンでトーラーを読むためのアプリケーション等などいろいろと教えていただきました。今回のご協力についてここに厚く感謝の意を表し、重ねて御礼を申し上げます。

（文責　小宮一浩）

【参考文献】

1. ミルトス・ヘブライ文化研究所編（株)ミルトス
ヘブライ語聖書対訳シリーズより 1～10 巻(創世記Ｉ＆Ⅱ、出エジプト記Ｉ＆Ⅱ、レビ記Ｉ＆Ⅱ、民数記Ｉ＆Ⅱ、申命記Ｉ＆Ⅱ)
2. 谷内意咲著（株)ミルトス
今日から読めるヘブライ語
3. 谷内意咲著（株)ミルトス
今日からわかる聖書ヘブライ語
4. キリスト聖書塾編集部編 日本ヘブライ文化協会
ヘブライ語入門ヘブライ語入門
5. 佐藤淳一著（株)ミルトス
はじめてのヘブライ語
6. ミルトス編集部編（株)ミルトス
やさしいユダヤ教Ｑ＆Ａ
7. いのちのことば社
新聖書辞典
8. サンパウロ 原文校訂による口語訳
聖書 フランシスコ会聖書研究所訳注
9. ライフ パブリッシャーズ
ファイヤーバイブル 注解付き聖書
10. 日本聖書協会
聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき
11. イスラエルとウディ・コーレン
聖書
Israel and Udi Koren Bible
12. Navigating the BibleⅡ (9 Jan. 2018)
http://bible.ort.org/intro1.asp
13. Tricks of the Trope：Lesson 1～３ (9 Jan.2018)
https://www.youtube.com/watch?v=BUhGnuwmJ4E

טַעֲמֵי הַמִּקְרָא　タアメー・ハミクラー

קַדְמָא　מֻנַח זַרְקָא　מֻנַח סֶגוֹל׃

מֻנַח מֻנַח רְבִיעִי　מַהְפַּךְ פַּשְׁטָא׃

זָקֵף־קָטֹן　זָקֵף־גָּדוֹל　מֵרְכָא　טִפְחָא

מֻנַח אֶתְנַחְתָּא　פָּזֵר　תְּלִישָׁה־קְטַנָּה׃

תְּלִישָׁה־גְדוֹלָה　קַדְמָא וְאַזְלָא　אֲזְלָא־גַרְשׁ

גַּרְשַׁיִם　דַּרְגָּא　תְּבִיר　יָתִיב　פְּסִיק׀

סוֹף־פָּסוּק:　שַׁלְשֶׁלֶת　קַרְנֵי־פָרָה

מֵרְכָא־כְפוּלָה　יָרֵחַ־בֶּן־יוֹמוֹ

● タアメー・ハミクラー一覧表 ●

分　　離

記号	名称	
דָּבָר׃	ソフ・パスーク	הָאָרֶץ׃
דָּבָר׀	エトナフタ	אֱלֹהִים׀
דָּבָר׃	セゴール*	אֶל־מֹשֶׁה׃
דָּבָר֑	シャルシェレット	וַיִּתְמַהְמָהּ֙
דָּבָר׃	ザケフ・カトン	אֱלֹהִ֔ים
דָּבָר֖	ザケフ・ガドール	וְעֵ֣ץ
דָּבָר֥	ティプハ	מְרַחֶ֖פֶת
דָּבָר֛	レヴィイ	וְהָאָ֛רֶץ
דָּבָר֚	ザルカ*	אֱלֹהִ֚ים
דָּבָר֙	パシュタ*	אֱלֹהִ֙ים
דָּבָר־	イェティーヴ*	עֵשֶׂב־
דָּבָר֟	テヴィール	אֱלֹהִ֟ים
דָּבָר֯	カルネー・パラー	בְּאַמָּ֯ה
דָּבָר֮	パゼル	הָרִמֶּשֶׂת
דָּבָר֭	テリシャ・ゲドラー*	הָאָרֶץ
דָּבָר֬	ゲレッシュ	אָזְלָא־גְרַשׁ
דָּבָר֫	ゲェルシャイム	אִשָּׁה
דָּבָר׀	ムナフ・レガルメ	הַחַיָּה׀

結　　合

記号	名称	
דָּבָר־	ムナフ	בָּרָא־
דָּבָר־	マフパフ	לְמָה־
דָּבָר־	テリシャ・ケタナー*	בְּאֶחָד־
דָּבָר־	カドゥマー	אֲשֶׁר־
דָּבָר־	メルハー	וְאֵת־
דָּבָר־	メルハー・ケフラー	לוֹ־
דָּבָר־	ダルガー	וְהִנֵּה־
דָּבָר־	イェラハ・ベン・ヨモ	אַלְפַּיִם־

● ＊の付いたタアメー・ハミクラーは、
単語のアクセント位置とは違います。

《必ず単語の最後に付く》
＊セゴール
＊ザルカ
＊パシュタ
＊テリシャ・ケタナー

《必ず単語の最初に付く》
＊イェティーヴ
＊テリシャ・ゲドラー

通唱で

Kad ma Mu na ch Zar ka Mu na ch Se go l Mu na ch MoachRevi

i Ma h pa ch Pash ta Mu na ch Za kef Ka to n Za kefGa do l Mer

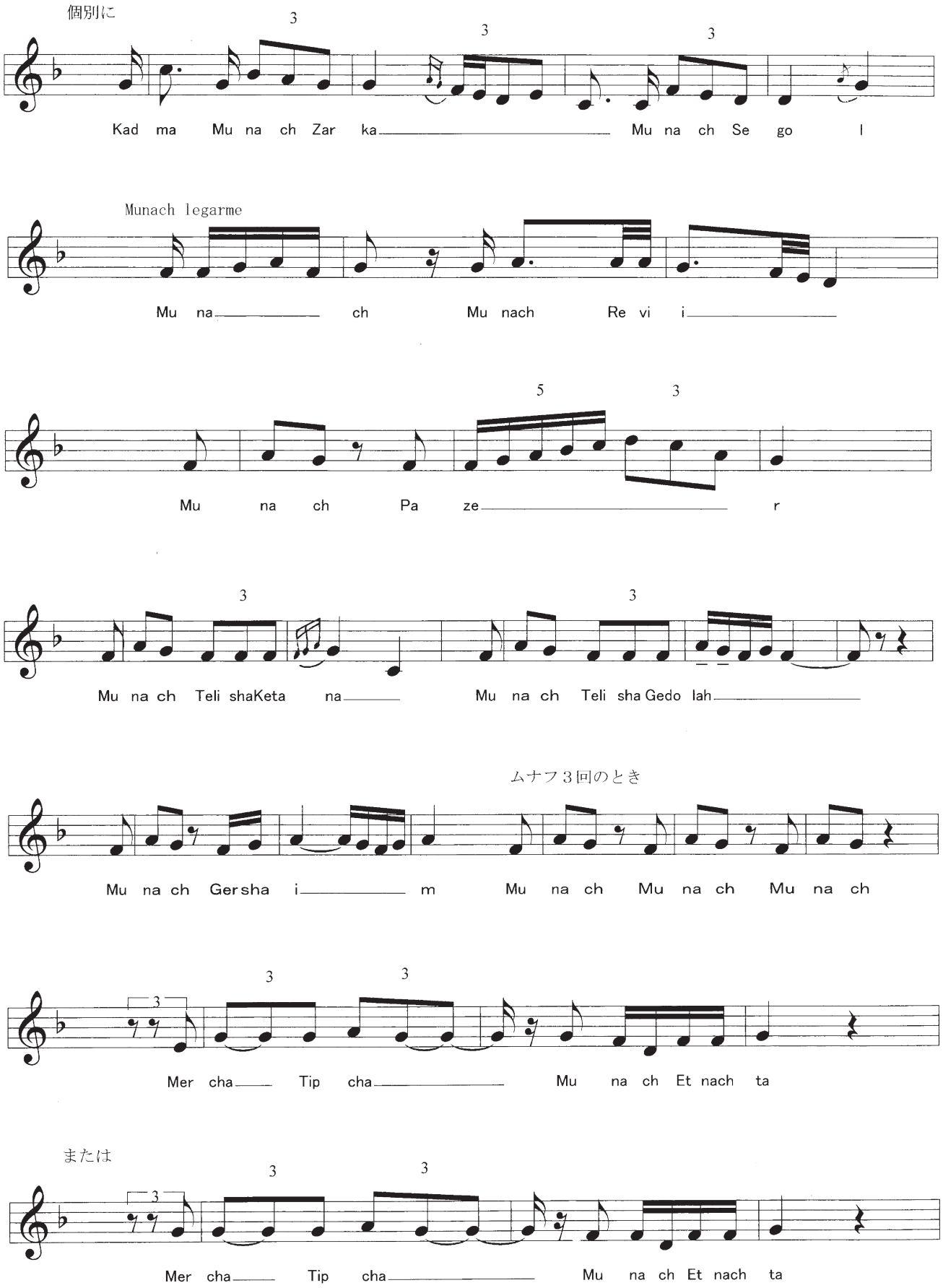
cha Tip cha Mu na ch Et nach ta Pa ze r Teli shaKeta na Teli shaGedo

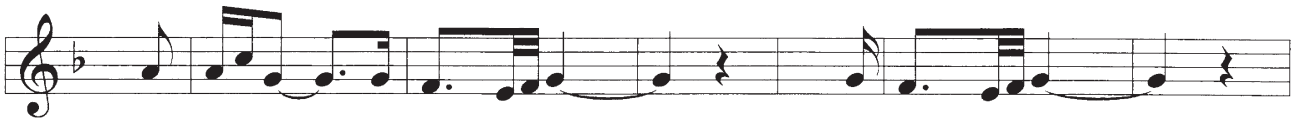
lah Kad ma Veaz lah Az lah Ge resh Gersha i m Dar

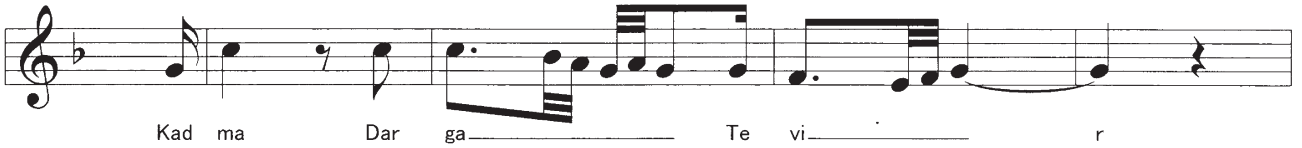
ga Te vi r Ye ti v Mer cha Tip cha MerchaSofPa su

k Shal she let Mer cha chefu lah

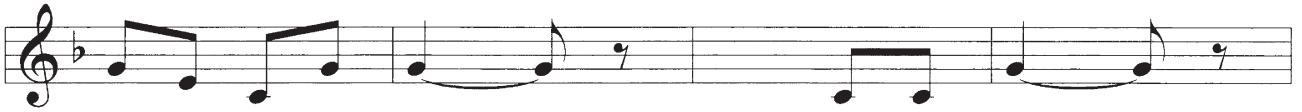
Ye ra ch be n yo mo Kar ne Pa rah


個別に
Kad ma Mu na ch Zar ka Mu na ch Se go l
Munach legarme
Mu na ch Mu nach Re vi i
Mu na ch Pa ze r
Mu na ch Teli shaKeta na Mu na ch Teli sha Gedo lah
ムナフ３回のとき
Mu na ch Gersha i m Mu na ch Mu na ch Mu na ch
Mer cha Tip cha Mu na ch Et nach ta
または
Mer cha Tip cha Mu na ch Et nach ta

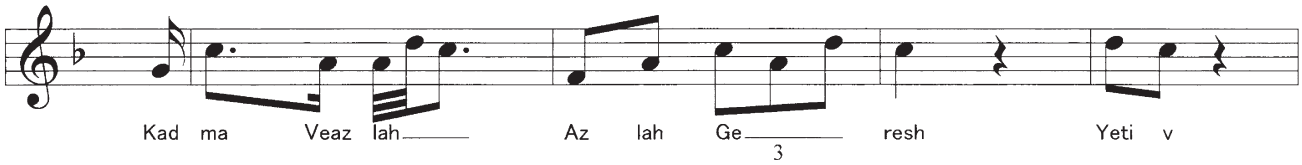
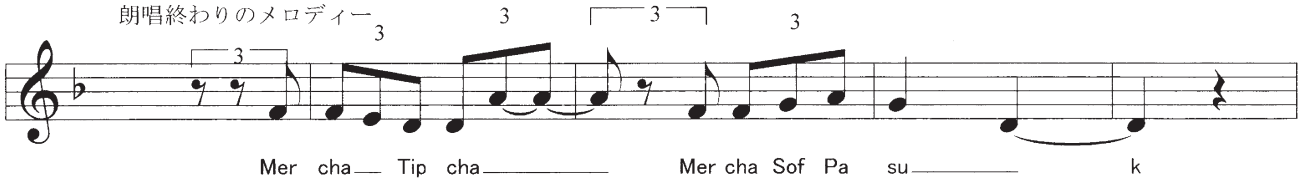
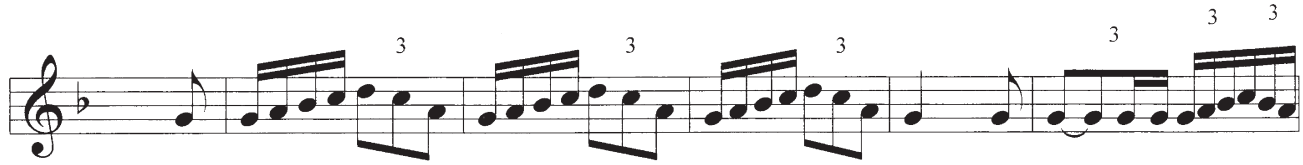
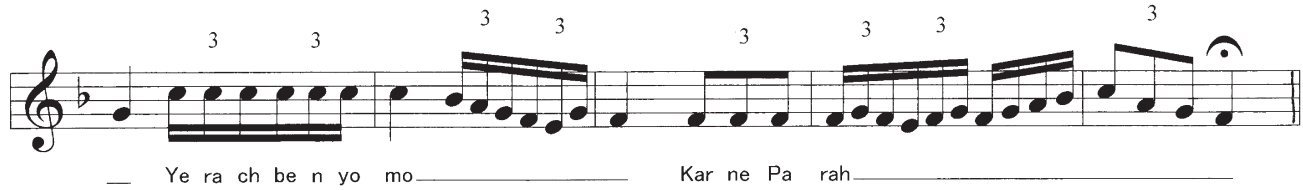




エトナフタ文頭のとき



イェティーヴ歌唱時



朗唱終わりのメロディー